

# 技術と公害

林 武



技術進歩はだれのため？  
いま伝えたい日本の負の体験

の念さへ示さない。魂なき専門職の荒涼たる精神風景の無雑作な開陳は肌に粟を生じさせる。人を殺したことに「人間として」かくも無表情でいられるものだろうか。それを、ハンナ・アーレント女史はユダヤ人として、自らの人間的品位において、新興イスラエル政権の品位問題と併せて、告発の書を公刊した。そのことを、公害問題を勉強する中で、幾度も思い出していた。

アイヒマンという、実はどこにもいそうな、病識のない病人・情操を完全に欠落させた命令に忠実な執行機械と、資本の「命令」に忠実なあまり犯罪の事実を知りながら、かえってこれを隠し通そうとしたチッソ会社の役員とくに工場長西田某の精神構造とは、まったく気味が悪いほど似ている。身なりの良いこの種の男たちには、粗暴犯にさえ時に覚えることだつてなくはない人間的な「共感」がまるで湧かない。動物にさえ感じ合える情感を共有しえない。

チッソ会社は、日本の化学工業史上に特筆されるべき功績をもつ先駆的な存在で、技術自立ということでは創業者野口遵の名が永く記憶されてゆくに違いない。同時に、勤勉な化学技術者、愛国者としての野口がもつ強烈

な選良意識は、塩田を失ったのちの水俣に産業を興し住民に職を「与えてやった」という思いあがりにつながるところが無いとは言えない。

公害問題を、我われは「日本の経験」プロジェクトの中核には据えていなかった。それを手短かに、しかし痛烈に、指摘・批判したのは、国連大学がレビニョーアに委嘱した鶴見和子上智大学教授のコメントであった。KOPANCHを浴びた思いで、予定をはやめて公害問題と取り組むことにした。そこには、インドの会議で会った宇井純の活動(報告、自作映画の上映)と、初めて直接に話を交わしたという事情が介在する。同氏に会ったことで、同氏への漠然たる印象的評価が私の中で変わった。公害という事実そのものが消えない以上、同氏の業績もまた消えない。同氏は技術導入を「社会に与えた負の衝撃」として扱っている。インドの会議で、同氏は「社会主義に公害はない」というイデオロギー神話を執拗に繰返えず中国その他の代表に、具体的な事例を挙げて丁寧に反論して、精彩を放っていた(のちに、旧満州に水俣病が発見される)。

この春、フランスで技術家たちと対話をする機会をえた。フランスの大気汚染は日本のみかそれ以上なのに、公害は日本にしかないような口吻の男もいて、ポリテクニク卒エリ

生きながら 羽毛をむしられた小鳥のような尾尾の山肌を見たり、水俣の病院に彎曲した四肢をもち横た小鳥のようになのだが)を見舞ったりすると、悲しみと憤りに感情が鬱屈して、やりきれなくなる。

同じ思いを広島と長崎でも経験した。そしてグッハウのユダヤ人強制収容所の跡でも味わった。生身の人間をガス室に送りこんだ現場責任者は貧相な小男で、それが「上位者の命令」であったことを理由に、いささかの自責

トの野蛮さに触れる思いだった。その連中が、口惜しうに話題にすることが多かったのはエレクトロニクスとロボットロジーであったが、その有名メーカーには、足尾鉍毒事件の古河鉍業から分れた会社がある。

瀕死の銅山を買い取って、世界的な大鉍山に仕上げたのは古河市兵衛であったが、かれは足尾銅山に最新技術を導入することに極めて熱心であった。技術史年表をくつてみれば、坑内電車、火薬発破、高炉、蒸気ポンプ、削岩機、転炉などの導入で先端を切っていたのがわかる。その点では、鉍山業の先達である住友の保守性とは対蹠的に著しく進歩的かつ開明的である。

だが、まさにそのことで、公害日本の原点となり原型を提出することになる。

鉍毒の被害を農民が訴え出ると、因果関係を否定し、否定しきれなくなると被害の過小評価と永久示談の押しつけ、そしてそれも思わしく運ばないと鉍毒をなくすることではなく鉍毒反対運動をなくする謀略をめぐらす。その行動様式は、のちの公害企業と寸分の違ひもない、という意味で企業犯罪の陳腐さを分らせてくれる。

公害を出せば企業は必ず潰れる、公害を出すような企業は組織体質に病根をもつ、というのが経験法則からくる我われの基本視座である。それはチッソ会社の例にも明らかだが、

古河の歴史にそれを辿ると、市兵衛は政治家たち（陸奥宗光・原敬・井上馨など）と深い関係を持ち、行政の手をかりて鉍毒問題を治水問題にすり代えさせた。被害農民の請願・抗議活動には治安問題として強圧でのぞませる。それは、日清戦争という背景があつてこそできた工作にしても、この軍需産業と政治家の癒着ぬきには語れない。

一時は旭日の勢いだった古河が、財閥の形態をついにはつくりえず、昭和初年から凋落し始めるのは「経営に政治家の介入を招いたからである」という（森川英正）。政治寄生的な賤民資本家だった、という訳である。

公害発生源は、事業所内に職業病を、所外には公害を、という「生体実験」的な構造と生理とをもっている。業界と行政との公害に対する処置はつねに後手で非能率である。とくに被害の補償・復原に関してはそうだから、被害者の抗議運動だけが切り札となる。

ところが、不況ともなれば公害の摘発は少くなる。隠微な形で公害は蓄積・進行しているのに、原因者負担の原則がかえって支払能力の限度に補償を縛りつけてしまふし、不況が支払能力を低下させる。現行法とその運用は未だ十分に人間の顔をそなえてはいないし、行政は被害者よりは加害者の企業の方にやさしい顔をむけがちである。

政治家としての田中正造は、古河市兵衛と

明治政府に惨敗することで、独自の治水論と権力論をもつ思想家に転成した。窮乏落魄の中に死んだ田中は、公害という、楽天的な非人間的なまでに楽天的な科学技術信仰の産物と生産力至上主義を告発する時に、人間としてのあたたかみに溢れた生きざままで蘇生してくる。

公害の問題は、公海汚染をふくむ国際問題としても緊急化している。開発と法的規制のギャップとして、各種「専門家の国際会議」では論じられてきたが、肝心なのは異なる文化を生きる人たちへの人間的「共感」なのである。南の友人たちは一様に Masuji House, "Black Rain" に感動する。石牟礼道子の「苦海浄土」にも英訳がほしい。読めば途上国のインテリも公害があるのは羨ましいなどと酔狂なことを口走らなくなるだろうから。その上、日本で安全が証明されても、数世代にわたる低栄養と低保健水準にある A A 諸国では安全を保証できないのである。

こうして公害問題は、一国のレベルをつきぬけて拡大されると同時に、加害者が被害者になるというもうひとつの局面に発展する。科学技術・企業・行政にだけ人間の顔と姿を求めるとでなく、人は自らの人間的価値と責任とに改めて向い合わざるをえなくなるのである。（はやし たけし／国連大学受託調査プロジェクト・コーディネーター）